
蒼雷竜と言われたの吟遊詩人

成金歩兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼雷竜と言われたの吟遊詩人

【Nコード】

N3355Y

【作者名】

成金歩兵

【あらすじ】

吟遊詩人であるエイルト・ハーモスは今日も豎琴を奏でる。

二年ぶりの故郷、帰ってみれば新米ハンターが居て、昔の自分を思い出してしまっ、蒼雷竜と呼ばれたあの頃、今も昔も変わらない故郷の風景、彼は何を奏でるのだろうか……

第一話 飛竜が空へ舞い、上空を過ぎる

地図によるとここはタロメンク密林だ、久しぶりに訪れる場所、もう少し行けば海に出るだろう、だが潮の匂いはまだ薄い、故郷まではまだ掛かるだろう。

美しい木々に、近くに流れる川の音、ザツザツと駆けて行くのはケルビの足音だろう、耳を澄まし、目を瞑れば詩がどんどんを浮かんでくるであろう。

真つ白だったノートは詩でいっぱい埋まり、それが何冊も繰り返される。

竖琴を持ち、今にも弾き出しそうだった。

だがこの密林は危険なモンスターが居ると聞く、だから弾く事はままならず、我慢して次の村へと急ぐ。

「……………疲れた」

約半日ほどだろう、俺は朝早くから歩き続けており、昼食も取っていない。

腹の虫も鳴っており、このまま歩き続けるのは無理だろう。

「釣りでもするか」

俺は川辺に出て、何時も使っている仕込み釣竿を取り出した。

使っているエサは木を小魚の形に削ったルアー、これがあれば絶対に何かが釣れる。

「おっ！……そら！」

いきなりヒットして、釣り上げてみた。

釣れたのはサシミウオで、丁度いいような大きさだった。

「さーて、サシミウオなら刺身にするのが一番いいな」

俺はナイフを取り出して、腸を切ろうとしたときのことだった。

ギャオオオオオ！

飛竜の咆哮と共に黒い影が上空を過ぎる。

声から察するにリオレイアかリオレウスだろう。

ここから近くない所に降りたのだろう、だとすればスケッチをするチャンス、だが腹を満たすほうが先決だ。

「まあ、飛竜の絵はいくつもあるからいいか」

俺が今度こそ魚の腹を切ろうとしたときだった。

キヤアアアアア！

多分、飛竜が降りた場所からだろう、女性の叫び声が密林全体に響き渡った。

「……ハンターだな」

この先を歩く事になる、その時に血の臭いがするととなると嫌で堪らない。

「昼飯……諦めるしかないか」

俺はサシミウオを川へと投げ込み、首から提げていた小さな笛をピーツ！と吹いた。

その音色は少し異質な物で、角笛と同じ効果を持つものだ。

直ぐにでも飛竜がこちらに来るだろう、だとすれば直ぐにでもここから離れなければ鳴らない。

「どっかで木の実でも探すしかないか」

俺は豎琴を抱えて直ぐにその場を離れる。

結局、夜まで何も食べずに歩き続ける事になって、俺はヘトヘトになった。

夕食にはしっかりと魚を数匹釣り、木の実を探して、しっかりとした夕食を食べる事になり、自然の恵みに感謝していた。

「やっとな飯にありつけた」

俺はサシミウオを刺身にしたり、鱗を削いで内臓を取り出し、ぶつ切りにして串に刺して焼いたりして、川の恵みを味わい、木の実などは砕いて焼き魚にまぶしたり、シンプルに一口サイズに切

ったりした。

何でぶつ切りにしたかというのと、案外サシミウオの骨が硬かったりするからだ。

旅をするのも長いので、これくらいの事は普通に出来る。

俺はサシミウオの木の実焼きにがつく。

「うまい、自然の旨みそのまま出てる、何時もの事ながら川と木の恵みのコラボは最高だ」

そんな事を言いながら、どんどんと食べ進め、直ぐに食事は終了した。

「ごちそうさまでした」

俺は手を合わせて事前に再度感謝を込めてごちそうさまをした。

その後、俺は豎琴を持ち、軽く奏で始める。

バチバチと焚き火の木が燃える音がしながら、豎琴の優しい音が密林に鳴り響く。

この豎琴はクルペッコの特性を真似た楽器で、聞くものを魅了し、そして音色で見も心も癒す、そんな力が秘められている。

弦には多彩な鉱石、楽器本体はラグァクルスの鱗が使われたとても希少価値の高い豎琴だ、何でそんなものを持っているかと言われれば、とても答えにくいのだが、今年で22になる俺は2年前まではハンターをやっていて、蒼雷竜と言われた少しは名のあるハンターだった。

2年前にラグァクルス討伐に行った時だ、リオレウス、リオレイアに出くわし、三匹とも何とか討伐したものの、深い傷を負ったきり、ハンターを引退、趣味だった絵描きと音楽を極める為に吟遊詩人として放浪の旅へ出て、つい先日、違う地方から戻ってきたばかり、今は故郷の村に帰る為にこうして旅をしている。

「傷は癒え、後遺症も無い、ハンターは何時でも再会できるが吟遊詩人が楽しくて堪らない……か」

今が楽しければいいのかも知れない、そう考えるだけで充実した日々になるだろう。

俺は日記を取り出し、こころ書き始めた。

【飛竜が空へ舞い、上空を過ぎし日、エイルト・ハーモスはハンタ
ー時代を懐かしく思う】

第二話 故郷への帰還、豎琴が鳴り響く直前のアクシデント

あれから一日と半日、いい感じに日が昇り始めた頃だ。

俺はついに故郷であるオズミア村までやって来た。

オズミア村は漁業が盛んな村で、水中のモンスター討伐が多かった村だ。

この村の周辺の海は水面から突き出たような岩がいくつもあり、ここからは豊富な鉱石や貴重な資源が採れ、近隣の村で高めで取引されていたり、国に買い取られていたりする。

規模のそれなりに大きく、検問まで知れている始末。

「そこの旅人、止まれ」

俺は門番に呼び止められ、俺の足が止まった。

「この辺じゃ見かけない顔、だ……な……… エイルト・ハーモス！
？帰ってきたのか！」

門番は俺の顔を覗き込んだ瞬間、ハツとした顔をして、驚いた。

「たっだいまー、元気だったか？」

「元気なわけあるか！お前がハンター引退したお陰でここ一帯のモンスター退治にどれだけ苦労したと思ってるんだ！」

門番は言い掛かりの様に俺に言ってきて、激怒する。

「ハンターの募集はしたのか？」

「あつたりめーだろ、何人もここに来たよ」

「結果は？」

ここ一帯はよく大型のモンスターが出現する土地で、並大抵の根性じゃ生き延びれない。

「2年間で4人が逃げていって2人死んだ、今は1人だけこの村に居るよ」

「出入りが多いのはこの村の特徴だろうが、激しすぎるな」

「まあ、ギルドの方に行けば分かるだろうぜ」

「そうさせてもらつよ」

俺は門をくぐり、村へと入っていった……

村へ入ると、皆が俺に気づき、色々と話しかけてきてくれた。

ハンター時代の事、今までの事、色々と話してくれて、村にあるギルドに行くまでに少し時間を喰ってしまった。

「お久しぶりでーす」

俺は気軽にギルドのドアを開け、軽い口ぶりに言い放った。

「おお！ エイルトではないか、久しぶりじゃの〜」

「村長もお元気そうで」

この村の村長は昔はかなり有名だったハンターで、狩人業となると俺より詳しく、戦い方まで心得ている、だが「ワシの若かった頃は

」が始まると3時間ぐらい付き合わされるので注意しなければならぬ。

「当たり前じゃ、この歳で爺さんとは言わせたくないからの」

確かこの爺さん、もう80になるはず、そろそろここのギルドマスターを引退して隠居生活に入ったらどうだ。

「なんか騒がしいけど、誰か来たの？ おじいちゃ、ん…………… エイルトさん？」

目を擦りながら眠たそうな顔をしてギルド二階の待機室から降りてきたのは村長の孫娘のアサノ・イブだった。彼女は2年前とは違い、ギルド嬢の格好をしており、少し大人びていた。

「久しぶり、見ないうちに大人っぽくなったんじゃないか？」

「ええ！ / / / / / そんな事ないよ、まだ17だし」

彼女は顔を赤らめてもじもじし出した。

「ほっほっほ、アサノもまだまだ子供じゃの〜、エイルトにか
らかわれてる事も知らずに」

「おじいちゃん！ エイルトさんに失礼でしょ！」

「いや、半分は本音、もう半分おちよくりだ」

俺はさらりと白状した。

「言ったであろう、エイルトは昔から少し大きさに言っておちよくなるのが好きだと」

「もー！」

彼女は頬を膨らませ、可愛らしく怒ってしまった。

「すまんすまん、吟遊詩人をやっていると表現の仕方が少し大きくなってな」

「口説くのは得意じゃろ」

村長はニヤニヤとしながら俺に言う。

「アンタの思考回路はなんでそう言う方向なんだ」

「ほっほっほっほ、心は何時でも若者じゃからの」

いや、若者じゃなくて獣か子供の間違いじゃないか？

「ところでアサノちゃん、この村のハンターって一人だけなんだよね」

俺は話を本題に移そうとして話を持ちかけた。

「はい、先月にハンターを始めたばかりの子がこの村のハンターですよ」

初めて一ヶ月か……まだまだこれからだから今後に期待しないとな。

「それで、その子は何所に？」

「今はタロメンク密林にジャギイの群れを狩りに行っていたと思うんだと……そろそろ帰ってきてもいい頃じゃない？」

タロメンク密林……そろそろ帰ってくる頃……つまり、俺と同じぐらいに居たハンター……あの悲鳴……

「無事だといいな……」

「どうしたのじゃ？エイルト、何か引つ掛かることでもあるのか？」

「ああ、タロメンク密林を通った時に飛竜が居た、しかも悲鳴まで聞こえた」

俺がそう言うと、二人の一気に顔色が悪くなる。

「それで、どうしたのじゃ？」

「もちろんこの呼び笛を吹いたよ」

俺は首から提げていた笛に二人に見せる。

「それなら安心じゃの」

「え？なんで？」

アサノが？マークを頭の上に浮かべる。

それに対し、村長はやれやれとした表情だった。

「この呼び笛はモンスターを呼ぶ力があるんだよ、角笛みたいに」

「漁師達も似たような笛を使っておるじゃろ」

「そういえばそうだね」

この村の漁師達は皆呼び笛を持っており、それを吹くと魚などが寄つてきて、それを網で捕まえると言つやり方で漁を行っている。

「ま、この2年間は各地を回って豎琴を奏でてきたんだ、ゆっくり聞いてくれよ」

俺は椅子に座り、肩から掛けていたカバンを下ろし、豎琴を構えた。

「おお、これは楽しみじゃの、二年ぶりというのがまた楽しみじゃ」

「確かに、2年も聴いてないとなると楽しみだね」

「それじゃあ一曲」

俺が豎琴を弾こうとした瞬間だった。

ドサツ、誰かが倒れる音がして、3人が顔を見合わせる、そして3人がゆつくりとギルドの入り口を見ると、一人の少女が倒れていた。

「……………この子？」

「そうなるかの」

「そんな悠長に言つてないで早く運ぶ！」

「はいはい」

俺はその少女をギルド二階の待機室に運び込み、アサノが手当てを開始した。

その間、俺はギルド一階の集会場で日記を取り出してこつ書き始めた。

【故郷への帰還、豎琴が鳴り響く直前のアクシデント】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3355y/>

蒼雷竜と言われたの吟遊詩人

2011年11月9日01時06分発行